

第3編 キリマンジャロ・ポレポレ

‘03年01月



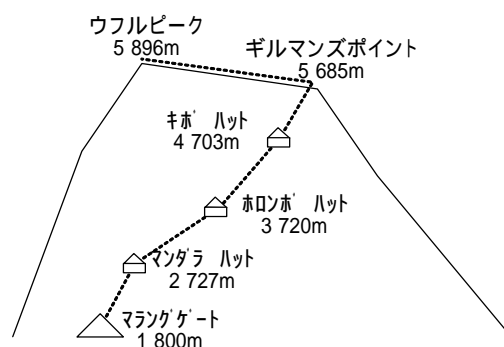
写真1 キリマンジャロ・ウフルピーク

1. キリマンジャロの登り方

キリマンジャロは標高 5 896m の山であるが、赤道に近いところに位置しているため一般ルートをたどれば雪に悩まされることは少なく、また岩山でもないのでロッククライミング技術の必要もない。したがってこれらの特殊技術を持たない私にとっては、地球上で一番高いところに立てるのはこの山であると考えている。

ポレポレとは、スワヒリ語で“ ゆっくり ” という意味であり、以前テレビドラマで薬師丸ひろ子・岸谷五郎主演の“ アフリカポレポレ ” (原作：岩合日出子) というのが放映されたので、知る人も多いことと思う。このドラマで使われたポレポレは、アフリカでは人の物事に対する考え方もすべてゆっくりしているという意味合いで使われていたが、キリマンジャロではもっと具体的に、高山病対策としてはゆっくり行動をとれという意味で使われる。

キリマンジャロへの登頂は、マランゲートで登頂手続きを行って、第一泊目はマンダラハット、2 泊目はホロンボハットに泊まる。3 日目はここで停滞して高所順応を行って、4 日目はキボハット。5 日目にギルマンズポイントを経てウフルピークをゲットした後、一気にホロンボハットへ下る。したがって 5 日目は 15~17 時間の行程が組まれる。西洋人の組む登山行程は、このように登頂日にはいっぺんに登ってしまって、さらに前日の宿泊所よりももっと下まで下ることが多い。高所対策の意味からはこれが最適な方法らしい。6 日目にマランゲートまで下り、登山終了となる。ちなみに故植村直己さんはキリマンジャロを 2 日でやつけたということであり、資質が違う。



2. 1997 年のこと

今回のキリマンジャロ登頂の話始める前に、1997 年に私がキリマンジャロを目指したことに触れておかなければならない。

1997 年 8 月、キボハットを夜中の 0 時に起きて軽い食事の後、1 時からギルマンズポイントへ向かう。キリマンジャロはちょうど乾期であり、前の人歩くときにあげる砂埃がヘッドランプの明かりを通して、もうもうと映る。- 10 以下と思われる寒さの中で鼻水が滴り落ちる。埃ごと吸い込むのもいやだし、ハンカチやティッシュを使うのも面倒くさい。こんなときは手鼻でピッとやるのが手っ取り早い。ポレポレ歩きであるので、こんな余計なことをやってもちょうどいいペースで進むことができる。ギルマンズポイントが近くなると傾斜も急になり、いかにポレポレとはいえきつくなる。このころ日の出が訪れて、ヘッドランプの必要も無くなる。ここで予期せぬことが起きた。急に腹が減ってきたのである。出発前の食事のときに、こんな深夜に飯なんか食えないよと、普通の人並みのことを考えてしまった。山では空腹でバテルことをシャリバテという。若いころに 30kg ものザックを背負って山登りをしていたころは、腹が減ると動きがとれなくなりシャリバテをしたものである。しかしこの日のようなサブザック程度の荷物では、多少の空腹感ぐらいでシャリバテをすることはなかったのであるが・・・。しかたなしにギルマ

ンズポイントの直下で、配られていた行動食を取った。このため先頭グループから遅れることになった。すでにギルマンズポイントに登っていた海外登山ツアー会社のリーダーである海輪氏がこちらを見ている。パテていると思われるのも面白くないのでギルマンズへ急ぐ。登りきったときに先発隊が最頂点のウフルピークに出発したのが見えた。すぐに追いかけてしようとしたときに、私の前に大柄なガイドのジョセフが立ちふさがり言った。“ You must return immediately ” 冗談じゃない。私はツアーリーダーの名を呼び、“ I am Kaiwa's member . I go, I go ” と叫び続けるが、ジョセフは“ You must return ” を繰り返すばかりである。ひとつのことが私の頭をよぎった。高所登山を行う際に、海外登山ツアー会社は健康診断を義務付けている。私は肺活量が 2 400 以下と極端に少ない。看護婦さんの測定では No の判定となった。しかしツアー会社のいわば御用医者 of 院長先生はそれでは商売にならないので、“ あなたの登山経験から考えると Ok です。” と、大人の判断でパスさせてくれた。高山へ入ると血中酸素濃度の測定なども行われる。ここでも私の数値は悪かった。平地では 95% 以上であるのが普通であるが、高山へくると 80% 台に下る。私はなんと 60% 台であった。それに加えてギルマンズの直下で飯を食べているところを見られてしまった。こんな理由からツアーリーダーがジョセフに命じてストップをかけたのだ、と判断した。私よりも遅くギルマンズへ登ってきた人たちもウフルへ向かっている中で、私はあきらめてキボハットへ下った。このときキリマンジャロと一緒に登ったメンバーの中で、ウフルのゲットに一番こだわっていたのは私であった。食事のときなどに皆は“ 自分は登頂と認定されるギルマンズまで行けば十分ですよ ” という人が多かった。キリマンジャロの山頂に近づくほどそう言う人が多くなって、そんな言葉を口にしないのは私だけになっていた。私は心の中で思った。“ そうか。ウフルへ行くのは俺一人か。心細いけどガイドを一人つけてくれるかな。” そんなことを考えていた私が目的を達成できなかった。

キボハットの中では、前日までの行動中によく顔を合わせていたイギリス人の女子大生がウフルピークをゲットしてきた。私に対して“ ギルマンズで戻るなんてもったいないわね。ギルマンズからウフルの間は傾斜も楽になり、何てことないのに。” とくりくりした目をひっくり返して言う。ウフルまで行った私のグループも戻ってきた。結局キリマンジャロを目指した 15 人のうち 7 人がウフルピークまで行ったことになる。私と顔を合わせた海輪氏が言った。“ 高橋さん、ウフルまで来ませんでしたね。” 高所でただでさえ興奮状態にあるところに、この言葉を受けて私の血が頭へ上っていくのが自覚できた。“ 何言ってるんだ、ジョセフに命じて私をストップさせたのは貴方ではないか。” 今度は海輪氏の人相が変わった。“ 冗談じゃない。私はツアーリーダーとして行きたいと言う人を止めたことなんて一度もない。” 海輪氏は、背は高くがっしりしていて色浅黒いが、性格温厚で誰からも好かれるナイスガイである。その後、海輪氏とは合計 3 回一緒に山へ行く機会を得たが、彼が怒った顔を見たのはこのときだけである。“ ジョセフを呼べ ” すぐにジョセフが呼び出された。“ Why are you stop him? He is strong ” 雇い主である海輪氏の剣幕にジョセフの態度はシドロモドロになりながら “ 彼は鼻血を流していて、高山病だった ” と言った。私に思い当たることがあった。手鼻をかみ過ぎたのだ。そのおかげで鼻の粘膜が切れて、私のダウンジャケットには飛散した血が付いていた。ギルマンズへ着くまでは日の出前であったので気が付かなかった。“ You must return ” と言われた後で気が付いたが、ただただ流れているわけでもない。それを鼻血だという認識もなかった。すぐにでも登り直したい気になったが、もうどう

しようもない。なおも海輪氏のジョセフに対する叱責は続いていた。私の頭に数日前に他のガイドから聞いた話が浮かんだ。この地域ではキリマンジャロでガイドやポーターとして 3 000 人以上の人が生活している。この仕事に就きたいと思っている交代要員はいくらでもいると言っていた。私は海輪氏とジョセフの間に割って入っていた。“ His judgment is right . Kaiwa, you don't get angry . Josef, you don't mind .” 日本人の私が日本人の海輪氏に対してなぜか英語で話していた。普段はろくにしゃべれないのに、このときだけはめちゃくちゃな英語で恥ずかしさも感じずにしゃべっていた。興奮していたのである。

無念さを抱いて帰路についた時、私は考えた。キリマンジャロだけが山ではない。世界にはもっといろいろな山がある。いろいろな山を登った後、5 年経ってまだキリマンジャロに登る気力があるのであれば、再び挑戦しよう。



写真 2 97 年のキリマンジャロ

3 . キリマンジャロ登頂

- 1998年 アイガー・マッターホルンの周辺トレッキング
- 1999年 中国四川省のタークーニャン (5 002m)
- 2000年 ヒマラヤのゴークョピーク (5 210m)
- 2002 年 パプアニューギニアのウィルヘルム山 (4 950m)

これらの山を踏破して 5 年が過ぎ、キリマンジャロへの再挑戦のときが来た。還暦も近くなり多少体力は落ちたが、まだあきらめる歳には遠い。正月休みに行くことにした。

今回の計画は、日本を発ってドバイ経由で、約 20 時間のフライトでケニアのナイロビに着き、翌日から 3 日間でケニア山に (4 986m) 臨むという強行軍である。その後 3 日間でサファリを楽しみながらタンザニアへ移動し、いよいよキリマンジャロへ向かう。今回のメンバーは、ツアーリーダー 1 人を含む 11 人構成である。

4 . 登山開始

マランゲート (1 800m) に着き登山開始である。ここで現地のガイドとポーターに引き合わされる。なんとガイド頭として紹介されたのは、忘れもしないあの “ You must return ” のジョセフであった。ガイドたちはチームとして行動しているようで、何人が覚えのある顔も見られる。5 年前はまだ少年のような顔をしていて、私の面倒をよく見てくれたクリスティンもいる。すぐに 1 日目の宿泊地のマンガラハットへ向かう。このあたりではまだ高山病の心配はないが、先の

ことを考えてポレポレ歩きで進む。マランゲゲート～マンダラハット間の高度差は1 000m程度であり、日本で登っている普通感覚では3時間位で登ることができる。そこを6時間かけて登る。勾配が緩いので距離が長く単純比較はできないが、超ポレポレである。私は登りでは、踏み出した足の踵が着いたときに1呼吸入れてつま先に重心を移すようにして、膝でタイミングをとる。そのとき後ろ足は振り子のように自然に前へ出る。1・2・3のタイミングである。超ポレポレであるので、前に支えてしまいそうになり、タイミングのとり方が大げさになる。後ろから見ればダンスを踊っているように見えるらしく、ガイドたちが笑う。とうとうラジオを持ってきて音楽をかけ、自分たちも踊りながらお前も踊れという。踊る格好をしてやるとげらげら笑う。クリスティンが私の前を歩く女性を指差して、“Your wife?”と聞く。“No but I hope so”と答えたので爆笑となる。寝袋などの荷物の大半はポーターが持ってくれるので、われわれは水や防寒具などの自分の荷物だけを持てばよい。ポーターは荷物を頭の上へ載せて器用に歩く。休みのときにジョセフが私の着ていたTシャツの“NEPAL”と書かれた部分を見て、“ヒマラヤへ行ったのか”と聞く。“Yes”と言うと、“ツアーリーダーは誰だったか”としつこく聞く。“海輪”と答えると、“Oh KAIWA my friend”と言う。彼は私を見ても何にも言ってこなかったので、5年前のことを忘れているだろうと思っていた。もしかしたら覚えているのかもしれないと思う。しかしそれ以上聞いてこないで、その場はそれで終わった。私は同じツアー仲間にも、キリマンジャロは2回目で、前はギルマンズでトラブルがあって、今回はそのリベンジであるということだけ言って、それ以上を話すことは避けた。くそ面白くもない思い出をぺらぺらしゃべる気もなかったので、詳しくはウフルをゲットできたら皆とジョセフに話そうと考えた。2日目はホロンボハット(3 072m)への移動である。この日の標高差は約1 200mで、8時間かけて登る。事件が持ち上がる。メンバーのうち一人の女性が、



写真3 マランゲゲート



写真4 ポーターの荷担ぎ

ひどい吐き気と下痢に襲われたのだ。まだ高山病になる高さではない。おそらく食べたものが合わなかったのであろう。出発時に“H子ちゃん、大丈夫かい？”と声をかけると“どうなるかわからない”という返事であり、100mも行かないうちに立ち止まって嘔吐が始まる。最悪である。もし、下で皆が戻るまで待っているとしても、それはそれで別の意味の大変さがある。何とか歩き続けられればいいなと思いながら、“H子ちゃん、頑張らなくていいんだよ。君のできる範囲のペースでやればいいんだ。”と声をかける。頑張るしかない立場の人に“頑張れ”と言うのは、プレッシャーを与えるだけで逆効果である。超ボレボレよりもさらに遅れるが、何とか歩き続けている。5時間も歩いたころになると、一番後ろのペースには付けるようになった。私は、彼女は付いてこられるであろうと見ていた。前のケニヤ山での登りぶりを見ていたからである。山の経験は少ないようであるが、足の送り方に抜群のセンスを感じる。“ただ歩くだけなのにそんな違いがあるのかい。”と思われるかもしれないが、イチローだって草野球だってバットを振るだけじゃないかという人には何もわからない。彼女は、毎朝出勤前にプールへ行って1000m程度泳ぐことを日課にしているという。並ではない。結局、飴玉だけをエネルギー源としてホロンボハットまで歩ききってしまった。

ホロンボハットは食堂棟を中心に、4人1部屋を2つ組み合わせて1棟とした小屋がたくさん並んだ構成になっていて、きわめて居住性が高い。

3日目は高度順化のためにホロンボハットに停滞であるが、4300mの鞍部まで行って戻ってくる予定となっていた。一度高いところまで行って戻ってくると、その高さでの高度順化が容易になるということである。

この時期は、キリマンジャロ地方は乾期であるはずであったが、毎日雨に合う。この日も歩き始

めて少し経つと雨になり、高度4000mのゼブラロックで引き返す。食堂の前で昨日親しくなったスイス人のグループと顔を合わせると、どこまで行ったかと聞く。ゼブラロックで引き返したと答えると、“勝った”とばかりに万歳の格好をする。単純なやつら。もうひとつの高度順化の方法としては、頻繁に小便をすることによる、循環機能の活性化である。1日4リッター以上の水分をとって、夜間には2度位は小便に立たねばいけないと教えられたことがある。

4日目にキボハット4703mへ移動する。7時間程度の歩行であるが、仮眠の後、深夜0時のキリマンジャロ登頂スタートであるので、本番開始は事実上この日からである。キボハットに近づくと、前日までホロンボハットで一緒であったが、高度順化停滞をせずに1日早くキリマンジャロ頂上を目指していた、2組の日本人パーティーが戻ってきたのに出会う。皆一様に疲れた顔



写真5 ホロンボハット

をしている。一組は全員がギルマンズまで行き、そのうち6割位がウフルまで行ったという。もう一組は一段と疲れた顔をしていてウフルのゲット率は3割に満たなかったようである。この中には3日前の登り始めのころに、“俺はお前たちとは違うんだ”とでも言いたげに、UN ポレポレ歩きでわれわれを追い抜いていった、私と同じくらいの歳のやつもいた。あのときの勢いはどこへやらといった感じで、ウフルまでは行けなかったらしい。ザマアミロとってしまったのは不謹慎かな。

5. ギルマンズポイント

5日目、いよいよアタック日であり、深夜23時に起床。18時から21時半までは熟睡できた。小便の後、横になるが23時まで眠れなかった。しかし3時間半は寝られたのだという気持ちに自然になれた。いわゆるプラス思考である。私はスポーツ新聞などがよく使うプラス思考という言い方や、会議の幕引きに“ここはひとつプラス思考で行きましょう。”などという使い方が嫌いである。結局何も考えていないことと何ら変わることがない。このときの私の頭にはウフルのゲット以外には何も考えるスペースはなかったので、やっぱり俺のプラス思考も唯のバカか。この夜は、“深夜に飯など食えるか”という人間的な思考は捨てて、飯代わりのビスケットをひたすら食う。さらにビスケット7枚を念のためポケットへ忍び込ませる。その上シャリバテ対策として、日本からチューブの蜂蜜やチーズなどを十分仕入れてきている。今回はシャリバテなど絶対ない。

0時過ぎスタート。最初はジョセフが先導役をする。しかしペースが速いと見てとったツアーリーダーの島方氏はスッと前に立ち超ポレポレペースに戻す。満天の星空であり、頭上にオリオンも輝く。今のところ天気は上々。連日1度は雨が降っていたので、懐中電灯に照らされる道に砂埃が立つこともなく、寒さに鼻水はぼたぼたと流れ落ちるがそのままにしておく。みっともない光景であろうが、真っ暗闇の中で誰が見るわけでもない。あまりにも遅いペースに、少しいらし始める。これではギルマンズまでで全員引き返すということになってしまうのではないかという疑念を持つ。ギルマンズまでの所要時間6時間の予定の半分までできたところで島方氏から20分休憩の声がかかる。(なぜこんなところで20分も休憩するのだろうか) ますます心配になってきたとき、どこかにいなくなっていた島方氏がヘッドランプを輝かせながら戻ってきた。彼が言う“これからは、強いさん組と普通さん組の2つに分けて行動します。強いさん組を希望の方はこちらに来てください。”願ってもない提案であったので、即座に強いさん組に志願する。なんと強いさん組志願者は私一人であった。ジョセフが意外という感じで当惑気味な顔をしている。前日までの食事時などの雑談のときにも、今度のメンバーはウフルのゲットなどということにこだわっている人はいなく、登頂と認定されるギルマンズで十分ですよという人ばかりであったので、この結果は不思議でもない。下山後に島方氏から聞いた話であるが、ジョセフからこのままではペースが遅すぎるので速くしたいと提案されたことに対して、2組に分けるという方向でジョセフの意向も取り入れたとのことであった。その内緒の打ち合わせのために20分もの休憩をとったらしかったのだが、寒さのため休憩は10分程度で再スタートした。2組に分かれても、その後の最初の1時間は何も変わらなかった。私は人に囲まれて歩くことが苦手であるので、メンバーの中で一番後ろを歩いていたのが、一番前に移っただけである。歩き出すときに、強いさん組の先導役になったクリスティンに言い渡した。“I take pore-pore walks . ok?” 1時間後に休

みの声がかかったときに普通さん組は私のすぐ後ろにいた。しかしその次から違いが出た。スタートの声がかかると、クリスティンと私はすぐに歩き始めたが、普通さん組は誰かおしっこから戻らないとかでスタートで出遅れている。しばらく歩いて振り返ったら普通さん組は見えなくなっていた。

勾配が急になってギルマンズが近いことを感じさせる。クリスティンが私の肘を突いて言った。“ Gilman’s 25minits. Are you take rest time or go? ” “ 何あと 25 分だって！ ” 自然と歩くのが早くなっていたのであろう。休憩を取った後に急勾配の岩を掴みながらギルマンズへ向かう。5 時 20 分ギルマンズへ立つ。まだ辺りは深夜を抜け出ていなく、星も輝いている。さーいよいよこれからだ。ここからウフルへ向かうことだけのために俺はこのコースに来たのだ。今、何も妨げるものはない。後は行くだけだ。クリスティンが 10 分休んだら行おうと言う。ここはチェックポイントであるのでみんなを待とうと思ったが、ヘッドランプの明かりさえ見えなく、寒さも募ってきたので行くこととする。



写真 6 ギルマンズポイント

6 . ウフルピークのゲット

ウフルへの道を踏み出したとたん雪道になった。しかしよく踏み込まれているし、登り勾配もここからは緩やかになり、アイゼンなどの必要性も感じない。前日下りてきた皆が口にしていた酸素の薄さも感じない。これなら日本の北岳に登るより楽だ。快調である。一昨日登った人から、ウフルに近くなると雪がアイスバーン状になると聞かされていたので気になっていたが、逆であった。この日はまったく雪はない。一昨日は雪がついていたのかもしれないが、日当たりのいい稜線であるので、融けてしまったのであろう。前回のことがあるので、常にいつ何が起こるかかわからないという気で登っていたが、頂上が見えてきてもう登頂を確信してもいいという気になった。外人さんグループが写真を撮っている。

6 時 35 分ついにウフルピークに着いた。自分の力で立ち得る地球上で一番高い場所と思っていたところに。頂上標識にも “ WORLD’S HIGHEST FREE-STANDING MOUNTAIN ” と書いてある。外人さんが私のために写真スポットを空けてくれたのでクリスティンと一緒に写真に納まる。クリスティンは、外人さんに付いていたガイドに対して “ He is strong ” と盛んに宣伝してくれる。このガイドが近づいてきて、クリスティンにボーナスをやってくれという。なんだ、まさかグルなんじゃないのか。外人さんたちはまた写真を撮り始める。山頂標識の下で本を読むポーズを取って写真を撮っている。案外無邪気である。

頂上に 15 分程居て、寒くなったので引き上げる。もう後の人たちはここまでは来ないである

うと勝手に決め付けた。キリマンジャロの氷河の写真を撮りながらゆっくり戻る。ギルマンズまでの中間点くらいまで戻ったときに、なんとわれわれのグループの普通さん組がジョセフに率いられて登って来るのと同じく。全員いる。最後尾に付けていた島方さんに礼を言う。ギルマンズが近づくと、腹が減ってきて、今まで感じなかった疲労感も伴ってきた。供給されていた行動



写真7 ウフルピークでクリスティンと

食をギルマンズで食う。富士山の砂走りのような斜面を降りる。前回のときは十分に体力が余っていたので、4時間かけて登ったところを、踵のコントロールだけで30分くらいで一気に下りた。今回は疲れが入ってきてそれができなくドタドタ下る。

あと1時間でキボハットへ戻るというところで休憩をとる。クリスティンに聞いてみた。“I came to Kilimanjaro 1997. Do you remember?” “Yes”さらに“Joseph too?” “Yes”彼らは気が付いていたのだ。

9時15分にはキボハットに戻り、睡眠不足の取り返しを図ったが、まだ興奮状態から抜け出せないためか寝付かれない。10時近くになると普通さん組も戻ってきた。頂上でついていた時間差と大差はない。後で聞いてみると、ギルマンズまで着いた彼らを、ジョセフ



写真8 キリマンジャロの氷河

が積極的に皆に勧めてウフルまで導いたということであった。あの“ You must return ”のジョセフが、である。中にはギルマンズ付近で高山病の症状が出て嘔吐を繰り返したという人までがウフルまで行っていた。島方流の超ポレポレが余裕を持ってギルマンズまで引き上げ、さらにジョセフの強気が全員をウフルのゲットまでさせてしまったのであるようだ。結果的には普通さん組の所要時間は多くの外人さん達のそれと比べてもそう落ちるものではない。前日まで迎えた日本人グループの戻る時間よりかなり早い。しかも皆の顔に疲れ果てた様子はない。私が一番疲れているくらいである。こんな登り方もあるのかと、改めて思う。

ホロンボハットに戻り、夕食後皆に5年前のジョセフとの経緯を話す。もちろんジョセフも同席の場で、である。皆がそんなことがあったのかと聞く中で、島方氏の通訳でジョセフはニコニコしながら聞いていた。話が終わったとき、ジョセフが“ Congratulations ”といいながら握手を求めてきた。私は“ アサンテ サーナ(スワヒリ語で「有難うございます」の意) I could get the Uhuru-peak by your support ”と言いながら彼の手を握り返した。終わったのだ。

翌日ホロンボハットから下るときに、登山道のパトロールをしていたガイドの中のボス的存在であるニカスに出会う。彼は前回来たときには、リーダーとしてわれわれのパーティーに同行してくれた。前回は軍服を着ていて、元はレンジャーということであるが穏やかな人である。キリマンジャロの宣伝活動として日本に来たこともあるらしい。“ I could get the Uhuru-peak by Joseph's support ”と伝えると、“ Congratulations ”と言いながら握手を求めてきた。その上、左手を差し伸べて分厚い胸板に私を包み込んでくれた。ニカスが私の2度目の挑戦理由など知るわけもないはずであるが、もしかしたら知っていて喜んでくれているのかなと思ってしまうほどの温かさであった。

7. 外人とのコミュニケーション

海外の山へ登ったときには、必ず外人に積極的に声をかけるようにしている。マランゲゲートを過ぎて最初にすれ違った外人に“ Where are you come from ? (どこの国から来ましたかの意)”と聞くと、クルッと後ろを振り返って“ from top ”と答えやがった。“ Where your country ? ”と聞き直す。“ England ”、近頃のイギリス人にも困ったもんだ。ろくに英語もしゃべれない。最初からこんなだから少し氣勢をそがれたので、ガイドとの会話中心に切り替える。

7.1. タンザニア人ガイド

スワヒリ語では“ ジャンボ ”というのが、こんにちば・おはよう・こんばんはを兼ねた言葉である。すれ違う人ごとに“ ジャンボ ”を連発する。

ガイドとの英語会話が一番気軽である。彼らは小学校から英語教育を受けており、英語ができることもガイドになる条件であるらしい。大多数は読み書きをできなく、会話のみである。こちらはそれ以下であるのでますます気軽になる。私の言ったことが判ろうと判るまいと“ Yes ”か“ Sure ”と答えてくれる。だから通じたのかと誤解してしまう。誤解でも何でもいいのだ。後はニコリで心は通じる。語尾を上げれば質問である。文法なんて関係ない。注意を要するのは、日本人は主語から喋り出すことに慣れていないことだ。“ 私は行く、山へ ”という自分中心の考え方であることは心得ておく方がいい。日本語では“ 山へ ”と言うだけで、“ 私は行きます ”を省い

たって通じるが、これはいけない。

ガイドのアントンに聞いた。“What a country do you like?” “JAPAN” “European no?” “Yea” “Do You like Korea?” “No” “JAPAN only?” “Yea” 好きなのは日本だけだという。彼



らはリップサービスなどしないので本心であろう。日本人にはチップの習慣が無いので、かえって弾んでくれるからかも知れない。欧米人を好まないということはなんとなく解る。欧米人は階級社会構造に慣れているので、雇った人間を目下に見る。欧米人が、私のように親しくガイドと話しながら歩いている様子なんて見たことがない。貧乏人の小せがれとして育ったことが有難く思われる。

写真9 クリスティン・H子ちゃん・アントンと

社会主義経済が敗れ去り、今資本主義に敵はない。「努力した人が多くの幸と富を得る」こういった単純な構図は好ま

れるところであるが、その手段としての銀行や企業の合併による国境を越えた巨大化は、globalizationとして現代文明が作り出した恐怖の黒いカーテンのように思える。マサイ族も、このガイドも、われわれ日本人も、欧米人もみな平等なんて遠い物語であり、もしかしたらそんな風にならないほうが幸せなのかもしれない。悪代官に虐げられたならば、いつか黄門様がお出ましになってやっつけてくれる。民主化というものは、自分自身やその周りの環境が持つ権利ということに目覚めない限りは、えらく疲れるものにもなり得るみたいだ。

7.2. スイス人

(シーン1)

2日目の夕食時ホロンボハットの食堂でのことである。私は、われわれのグループの一番はじに座っていた。隣の6人位の外人さんグループが雑談をしている。誰かが“あいつら何語で話してるんだ。”と言う。早速隣のやつに話しかける。“Where are you come from?” “Switzerland” “Oh, I went Switzerland 4 years ago.”と言うと、彼はペラペラペラと畳み掛けてくる。さらに“ I looked Eiger (アイガー) and Matterhorun .(マッターホルン)”と言うと“

テ”(何言ってるんだか判らない)。無視して“ I went Grunderuwarud (グルンデルワルド) and Zermat (ツェルマット)”と付け加えると“ テ”(ますます解らなくなる)見かねて私の隣に座っていた茨城県の高校の先生が助け舟を出してくれて、英語でペラペラとしゃべる。彼は奥さんと息子さんの3人でこのツアーに参加している。奥さんも先生で、お子さんは医学生と聞いた。丸出しの茨城弁が特徴であるが、インテリ一家である。両隣から、私の頭の上を通過して英語が飛び交う。何が話し合われてんだか見当がつかない。(何だよう、きっかけ作ったのは俺なのに無視されちゃった)目の前のパンをつかみバターとジャムをコッテリ付けてほうばる。立場ないんだよ。先生は「脳ある鷹は爪を隠す」タイプである。一方私は「能無し豚はヘソまで

丸出し」タイプである。

これだからスイス人は嫌いだって言うんだよ。

(シーン2)

頂上アタック前の4日目にキボハットでトイレに行こうとすると、例のスイス人グループが日向ぼっこをしながら雑談している。横を通り過ぎようとする、グループに二人いる女性のうち熟年に近いほうが話しかけてくる。“ ”突然のことだったので聞き取れなかった。“ What? ” “ Your feeling? ” “ あー feeling . Good I am best. ” そういえば彼女は2日前に大きな岩の上にちょこんと座って、仲間がトイレかなんかから戻るのを待っているような感じのときに出会った。“ Beautiful woman on the rock . It's like a picture ” と言ってやると、キャットと言って喜んでいて、あの彼女だ。ほかの仲間も一斉に話しかけてくる。“ ” 「能無し豚」には例によって解らないが、時々山頂の方を指差したりしているの、明日のアタックのことを言っているの、ということぐらいの検討はつく。こんな時には先手を取るに限る。“ Do you know GANBAROH of Japanese? ” と聞く。かれらは首を横に振る。“ GANBAROH is 「 Lets go with power 」 ” と言って、山頂を指差して “ GANBAROH (ガンバロー) ” と言うと、かれらも親指を立てた手を前に突き出して、“ GANBAROH ” と唱和した。

スイス人って案外いいやつらだ。

(シーン3)

5日目の山頂へ登頂の後、ホロンボハットでの夕食後に雑談をしていると、この日はわれわれとは離れて座っていたスイス人グループのうちの一人が私の方を指差して何か言っている。雰囲気 “ 今日の登頂の首尾はどうだったか ” と聞いているように思えたので、“ We could climb Uhuru-peak all members ” と叫ぶと、仲間同士で雑談をしていたスイス人達も全部がわれわれの方を振り返り、“ Congratulations ” と言って、親指を立てた手を前へ突き出してきた。日本とスイスの民間外交成功である。

だから俺はズーと前からスイス人が好きだと言ってるんだよ。

7.3. ロシア人

(シーン1)

1日目マランゲートへの登りで、4人ぐらいのロシア人パーティーに追い抜かれる。黒プチ眼鏡に坊主頭のタコちゃんは、われわれグループの女性たちの人気者であった。いつものように “ Where are you come from? ” と聞くと、“ Moscow ” と答え、続いて “ コンニチハ・アリガト・スシ ” と、知っている日本語を並べ立ててきた。その風貌とこの愛嬌が「タコちゃん」命名の由来となる。ほかに一人のとびっきり美人が含まれていた。日本の女優にたとえるならば若村麻由美の顔に、鼻だけ2倍の高さにした顔とでも言えればいいか。その高い鼻筋がスーと通っている。背筋もピシッと伸びた歩き方で、着ているものもあか抜けている。まるでバレリーナが間違っただけで山登りに紛れ込んでしまったようだ。彼らもわれわれと一緒にの行程で歩いたので、接触の機会も多かった。

(シーン2)

登頂を終えて、キボハットからホロンボハットに下るときのことである。キリマンジャロでは、

高山病にかかるると担架の下に1輪車を付けたベッドに乗せられて、4人のポーターに運ばれて山を下る。なんとロシア人の一人が寝かされている。寝たまま鼻筋美人や他のロシア人に向かって、一足先に下るよというように挨拶をしている。日本人であったら、合わせる顔がないというような雰囲気ではよぼくれているものであるが、彼らは戦争で名誉の負傷をしたように思っているのかと思わせるような態度である。僕は一生懸命やった結果がたまたまこうなったとでも言いたげである。しかし俺から言わせれば自業自得だよ。ロシア人に限らず外人たちは、高山病にはよくないと言われるビールを平気で飲んでいる。“Beer OK? For high-mountain damage”と聞いたら、“It's a Energy”と言いながら、腕でホップ・ステップ・ジャンプのカッコウさえしていた。また歩くスピードも速すぎる。私がウフルへ登ったときも、最初は追い抜かれた外人連中が山頂近くではバテているので、追い抜き返していた。高山病になりたいと言いながら登っているようなものである。私は彼に向かってにっこり笑いかけながら、日本語で“でっかい図体しているくせにダラシネエンだよ”と言った。彼は、“よく頑張ったね”と言われたと思ったらしく、そのノーブルともいえる顔でスマイルを送ってきた。(スットコドッコイ、とっとと失せやがれ)
(シーン3)

気が付くと、キボハットの小屋に背中をもたせて日向ぼっこをしている鼻筋美人と、私だけが残っていた。ここはひとつ日本男児を代表してご挨拶をしなければ。“When did you leave to going Kilimanjaro?”彼女の答えは“0 o'clock mid night”。ここまではよし。さらに質問“We left hire about same time”少しおかしくなってくる。“What?”彼女が聞き返す。“0 o'clock you same time”自分でも何を言っているのか解らなくなってきた。彼女の額に八の字が寄る。嫌われてはいけないと思うと、よけい言葉が出てこない。「能無し豚」の限界である。私はそそくさと仲間の居る小屋の中へ逃げ込んでしまった。みんなと外へ出ると彼女はすでにホロンボハットに下ったあとらしく、居ない。ここでハッと気がつく。なんであの時、RUSSIAとJAPANに区切って、下の砂地に一覧表を作らなかったのだ。座り込んでJAPANの方に自分のコースタイムを書き込めば、彼女はRUSSIAの方に書き込んだであろう。そうすれば肩と肩が触れ合うことだって出来たかもしれない。なんであの時そのことに気が回らなかったのだ。俺はまだまだ修行が足りない。ホロンボハットまで帰り着くと、彼女は自分のロッジの入口階段に腰掛けて日向ぼっこをしていた。日向ぼっこが好きな人だ。私を見止めると手を振ってニッコリと笑顔を見せた。あきらめるな、まだ切れたわけではない。しかしそれ以降、彼女と顔を合わせることはなかった。

7.4. アリュウシャの西洋風ホテルでのこと

キリマンジャロを下りた日に、アリュウシャという田舎町の西洋風ホテルに泊まる。久しぶりに風呂に入ると、浴槽中垢だらけになっていた。翌朝、きれいになって朝飯を食べているとき、食堂にはわれわれと同じように日焼けしているので、多分キリマンジャロから下りてきたと思われる西洋人グループがいた。“やー、皆さんもキリマンジャロに行ってきたのかい”と言いたかったが、言葉が出てこない。たかが田舎町のホテルに場所を移しただけで、山の垢の代わりに「引っ込み思案と遠慮」のシャツが身体にまとわり付いてしまった。「能無し豚」がヘソを隠すようになったら終わりだ。地平線しか見えない国から、地平線を見ることができない日本に帰って出直した。